

## 韓半島南部の先史古代の農耕技術—日本列島との比較を通じて

大庭重信（大阪市文化財協会）

【要旨】東アジアの先史農耕は、中国大陸の華北でアワ・キビを中心とした畠作、華南でイネの水稻作がBC6000～7000年頃には開始され、その後、気候の変化や人間の移動によって周辺地域に拡散しました。中国新石器時代のイネ・アワの分布をみると、おおよそ北緯30°から40°の間で両者が重なり、韓半島もほぼこの範囲におさまります（図1）。つまり、韓半島は華北からの畠作と華南からの水稻作が合流する地域であり、ここから日本列島へも農耕が伝えられたのです。

近年、気候変動に伴う農耕民の移動によって東北アジアに農耕が拡散し、BC4000年紀の後半（第一段階）、BC3000年紀の後半（第二段階）、BC2000年紀半ば（第三段階）、BC8世紀（第四段階）の波があるという説が九州大学の宮本一夫氏によって提起されています（図3、2009『農耕の起源を探る—イネの来た道』歴史文化ライブラリー）。宮本氏によると、第一段階は華北型の農耕石器とともにアワ・キビ作が韓半島に広がった段階、第二段階は山東半島から遼東半島を経て韓半島中南部にイネが単独で伝わった段階、第三段階は、水田・畠やそれに伴う農耕具等が山東・遼東半島から韓半島に広がった段階、第四段階は韓半島で定着した灌漑水稻農耕が北部九州に伝わった段階、とされています。

また、日韓の農耕起源に関する近年の重要な成果として、レプリカ法を用いて土器に付着した植物種子の圧痕を同定する研究が進んだことがあげられます（図6）。これによると、朝鮮半島南部では新石器時代にアワ・キビなどの畠作物が栽培され、青銅器時代になってイネが加わります。また日本列島では、かつて弥生時代以前の農耕を考える「縄文農耕論」がありましたが、土器圧痕分析からはダイズやアズキといった豆類が縄文時代に広く利用・栽培されていたことがわかってきました。そして大陸起源のイネやアワ・キビの最も古い例は今のところ弥生時代早期です。

韓国で農耕遺跡の調査が進展したことも近年の大きな成果で、これにより日韓両地域の先史農耕を具体的に議論することが可能になってきました。日本では弥生時代早期、韓国では青銅器時代前期末の水田調査例が最も古く、韓国で見つかっている水田・畠の多くは、日本の弥生時代早・前期に相当する青銅器時代後期のものです。また、近年は新石器時代中期に遡るとされる畠遺構が韓国の江原道高城文岩里遺跡で調査され、議論を呼んでいます。

今回は、宮本氏が提起した農耕化の第一段階も視野にいれつつ、韓半島南部の第三・四段階（韓国という青銅器時代）の農耕の特徴を、西日本の第四段階（日本でいう弥生時代）の事例と比較しつつ紹介します。日韓両地域の間には、気候や地形条件などの自然環境の違いを背景にした水稻作・畠作の選択や耕地の形態、および両者の運用方法の違いがみられ、これらからそれぞれ地域の特有の生業戦略を読み取りたいと思います。